

インプラントで補綴された患者における 主機能部位と咀嚼能力について

谷川 雄一

松本歯科大学 大学院歯学独立研究科 顎口腔機能制御学講座

Location of main occluding areas and masticatory ability in patients
with implant-supported prostheses

YUICHI TANIGAWA

*Department of Oral and Maxillofacial Biology, Graduate School of Oral Medicine,
Matsumoto Dental University*

Tanigawa Y, Kasahara T and Yamashita S
(2012) Aust Dent J 57: 171-7.

【目的】

硬い食品の咀嚼時には、第一大臼歯上に存在する主機能部位が中心となって粉碎が行われことが多いとされている。しかし、臼歯部の咬合が崩壊した場合に、これを補綴装置によって修復を行ったとしても、新たな口腔内環境において主機能部位がもとのように第一大臼歯部に存在するの否かについては、不明な部分が多く残されている。

そこで本研究では、臼歯部咬合支持の喪失を補綴処置した場合の主機能部位の位置や咬合接触関係、さらに咀嚼能力について、インプラント患者と部分床義歯患者との間で比較検討することを目指した。

【方法】

被験者は松本歯科大学病院補綴科に来院した患者の中から、Eichner 分類 B1～B3 で欠損部位がインプラント（26名）ないし部分床義歯（24名）により補綴された者を選択した。なお、欠損部位には第一大臼歯が必ず含まれる症例に限定した。また、対照として健常有歯顎者44名を選択した。

主機能部位の判定では、長さ4 mm のストッピング片を試験試料とし、噛みやすい任意の部位で1回の噛みしめを行わせた後、歯列上におけるストッピングの位置を観察した。また、主機能部位の咬合接触関係が天然歯同士なのか、あるいはインプラントや部分床義歯の補綴装置上なのかについても併せて検討した。

咀嚼能力の評価には、主観的評価に基づくアンケート調査を用いた。これは20種類の食品について咀嚼することが可能か否かを質問し、得られた回答を点数化したものである。

本研究の遂行に先立ち倫理審査委員会の承認（第0109号）を得た。

【結果】

インプラント患者では、健常有歯顎者と同様に主機能部位の多くが第一大臼歯群に認められたが、部分床義歯患者では小臼歯群に主機能部位の存在する傾向が強くなった ($p<0.01$)。また、インプラント患者では補綴装置上にも主機能部位が存在する傾向にあったのに対して、部分床義歯患者では、天然歯同士の咬合接触上に存在する傾向が強

かった ($p < 0.05$)。咀嚼能力評価については、部分床義歯患者において主機能部位が小白歯群に位置している場合の方が、大白歯群の場合よりも低いスコアを示す傾向が認められた ($p < 0.05$)。

【考察および結論】

インプラント患者における主機能部位の位置は、部分床義歯患者に比べて健常有歯顎者に近い傾向を示し、インプラント上に装着された補綴装置であれば天然歯と同等の機能を営んでいる可能

性が示唆された。

【文献】

- 1) Nakatsuka Y, Yamashita S, Nimura H, Mizoue S, Tsuchiya S and Hashii K (2010) Location of main occluding areas and masticatory ability in patients with reduced occlusal support. *Australian Dental Journal* **55(1)**: 45-50.
- 2) 咀嚼時, 主機能部位の観察. 加藤 均, 古木 譲, 長谷川成男. 日本顎口腔機能学会雑誌 2 巻 2 号 125-33.